

琵琶博だより

写真「田んぼの生きものシリーズ1」
ハコベ



「民具を科学する」－農具からみた滋賀県の地域性

琵琶湖博物館の地下には、体育館3つほどの広さがある収蔵庫があるのをご存じですか？ その一角に1万点を超える民俗資料が保管されています。その多くは滋賀県が昭和53年(1978年)から平成8年(1996年)までに集めたもので、すべてのデータは5冊の資料目録とホームページ上で公開されています。

その中に、農業で使う基本的な道具の^{すき}鋤が40点あります。^{おおくらながつね}滋賀県の鋤については、古く江戸時代に、大蔵永常が「江州鋤^{ごうしゅう}」として紹介しています。

近江国栗太郡周辺(現在の草津市・栗東市など)でこの鋤を用いる。他国で用いるものと比べると形がいささか大きく、京鋤に類し、少し曲がりがある、畦底の土をすくうのには至って便利で、仕事がきれいにできる。

大蔵永常『農具便利論』(1822年)より

博物館の鋤は、大きく「直柄型」「曲柄型」「水平型」「扁平型」の4種類に分けられます。主に、直柄型は湖北、曲柄型は湖東、水平型は湖南地域、扁平型は湖南地域の扇状地で使われています。このうち大蔵永常が江州鋤と呼んだのは水平型です。

このような違いはどこから生じたのでしょうか。理由は二つ考えられます。

まず、一つ目は地理的要因です。滋賀県のまん中にはその面積の6分の1を占める琵琶湖があり、周囲は山に囲まれています。このように湖から平地、扇状地、山といった複雑な地形があり、水田の土質や耕作方法にも違いがみられるため、農具もそれに合わせて発達してきたと考えられます。

二つ目として歴史的要因があります。日本に水田稲作が伝わったのは縄文時代晩期

(今から約3000年前)といわれていますが、米とともに鋤や鍬などの農具も朝鮮半島から伝わりました。その後、500年をかけて水田農耕が日本列島に定着していきましたが、その際、鋤先まで一本の板で作った鋤(一本の鋤)と鋤先と柄が分かれている鋤(組合せ式鋤)が考案されました。現在、滋賀県に残る鋤はこの2つの系譜をひいているために多種類に分かれたと考えられます。

資料を分類してその分布を調べていく作業は、基本的に生物調査と同じです。違いは、民具にはまだ図鑑がなく、自分たちで分類しながら調査を進めていることと、変化の要因を歴史や地理、文化的環境などから類推していることです。このような研究の成果をギャラリー展「民具を科学する－明治時代の絵図と現代の実測図からみた滋賀県の民具－」(2012年1月7日から3月11日まで開催)で紹介します。ぜひお越しください。

(特別研究員 辻川智代)

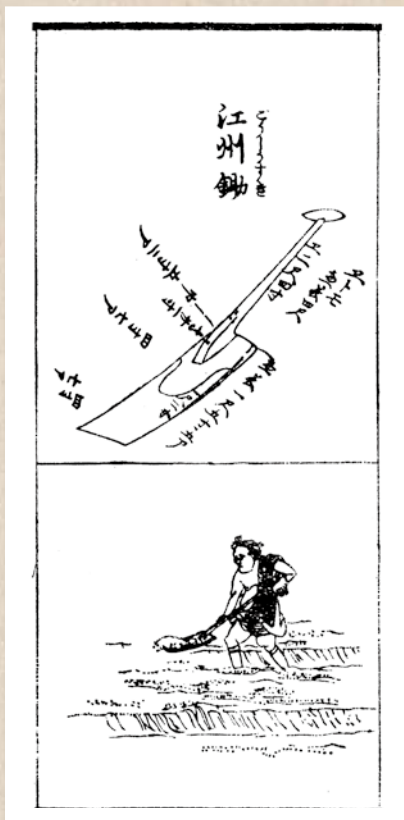


図1『農具便利論』にみる江州鋤

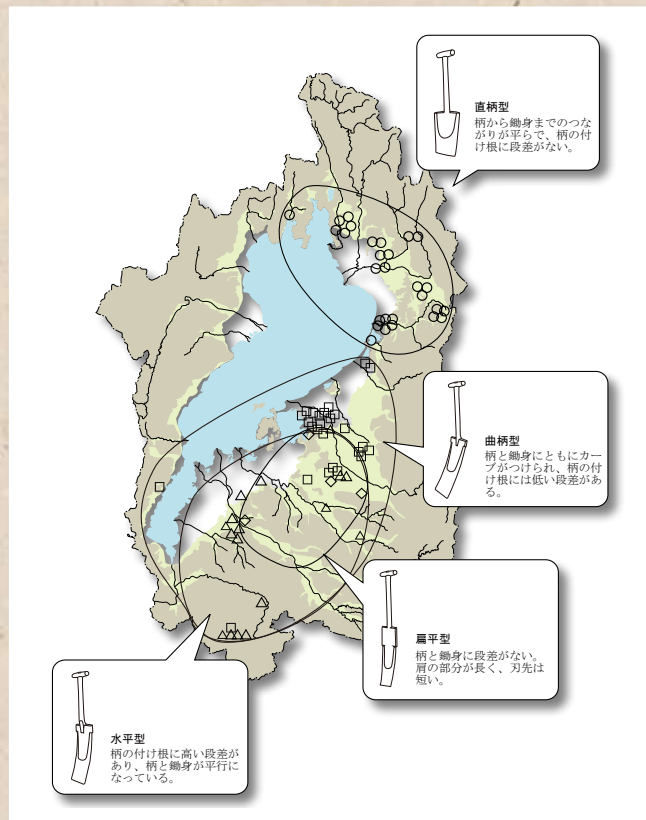


図2 滋賀県の鋤分布図

滋賀県博物館協議会

滋賀県内には、琵琶湖博物館の他にも多数の博物館や資料館があります。何かの専門分野の資料や情報を収集整理して、展示などに利用しているところは全て博物館だと考えると、県内には200館近くの博物館があることになります。その活動内容や規模は様々で、自宅を拠点に興味で活動している人が、公民館の片隅を借りて展示しているなどのささやかな事例もあります。

このように多種多様な博物館ですが、博物館であるがゆえに同じ課題を多く抱えています。それを互いに協力しあうことで解決していこうと、そのうちの何館かが集まって「滋賀県博物館協議会」（略して「県博協」）という組織を作りました。現在、76館が加盟しています。

県博協の現在の活動は、インターネットを通じた広報活動と、毎年テーマを定めて2～3回ほど行っている研修活動とが中心です。また、創立5周年ごとの節目に記念事業を行い、活動の幅を広げていくことを目指しています。20周年では、皆さまに実際に各館へ足を運んでいただくために、加盟館を巡るスタンプラリーを開催しました。25周年では、それに加えて、加盟館が持ち寄った展示物を一堂に集めた展示を琵琶湖博物館で開催し、会場では活動内容を紹介するワークショップや講演も行いました。

そして、来年度（2012年）秋の30周年に向けて、記念事業の内容を検討しています。ワークショップや講演会を、琵琶湖博物館だけでなく県内各地で実施する案を軸に考えています。皆さまに気軽にご参加いただき、さらに各加盟館の活動にも参加していただくきっかけになればと思います。是非、足をお運びください。

（主任学芸員 戸田孝）



写真：25周年記念事業の様子

- ① 豊臣秀吉の扮装で講演する長浜城の学芸員
- ② 瓦当（がとう）柘本の採拓体験（観峰館担当）
- ③ 風呂敷包み教室（近江商人博物館担当）
- ④ 航空写真パネルに加盟館の位置を示すポールを立てました



【資料裏話 その3】 神社とお坊さん

これは、大津市の日吉大社のお祭り、山王祭（さんのうさい）のなかで、神輿を船に載せて漕ぎだし、湖上でお供え物を供える船渡御（ふなとぎょ）のシーンを描いた江戸時代の祭礼図の一部です。船にお坊さんが乗っていることがわかるでしょうか。実は平安時代頃から江戸時代まで、日本の神さまは仏さまが姿を変えて現れたものと考えられていて、神社でお坊さんが神さまをお祈りすることはごく普通のことでした。この資料はそうした神仏習合のあり方を示すものとしてもたいへん貴重です。

（主任学芸員 橋本道範）

編集後記

寒い時は、やっぱり鍋料理が恋しいですね。近江で「じゅんじゅん」と風情のある名前でも言われる「すき焼き」も人気の鍋ですね。なぜ、牛鍋ではなく「すき焼き」と称されているのかには諸説あり、有力なのが農具でもある鋤を使って肉を焼いて食していたことが由来とか。琵琶湖博物館の資料にある鋤も、昔は、野の獣であるイノシシをオカクジラと称して焼いて食することに使われていたのかもしれないね。（てら）

◆巻頭写真の説明

ハコベは春の七草のひとつ。七草がゆは、冬に葉のものを食べて、不足しがちなビタミンを補うための伝統食です。

栽培植物の、すずな（カブ）、すずしろ（ダイコン）も、水稻の裏作でつくられることから、春の七草は冬の田んぼで見つけることができます。

鳥の目 魚の目 クイズ

「春の七草について」

Q 春の七草には、共通した特徴がいくつかあります。その特徴に当てはまらないものはどれでしょうか？

- ① 冬に花が咲く
- ② 冬の田んぼでとれる
- ③ 冬でも葉が青々としている

答えは、紙面のどこかにあります。